

# 國學院大學學術情報リポジトリ

How was the Expression “(yo) o to suru” with the Non-volitional Subject Used by Authors in the Meiji and Taisho Periods?: Examples and Their Interpretations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000958">https://doi.org/10.57529/00000958</a>

# 無意志主体の「(よ) うとする」は

どのように用いられていたか

—明治大正期作家の用例と、その読解—

中村 幸弘

キーワード：複合辞「(よ) うとする」、無意志主体、到達

点・終着点に向けての漸移、究極の到達点「死」  
に向けての漸移、受身状態に向けての抵抗で  
きないままの漸移

## 一 「(よ) うとする」についての大方の認識

『日本国語大辞典』（小学館）初版（一九七二年完成）を見たとき、刊行年の早い巻に収められる助動詞「う」の項で「うとする」に触れられることはなかったが、五十音順が後になる助動詞「よう」の項には、そのブランチ③として「ようとする」が取り立てられた。第二版（二〇〇二年

完成）の「う」の項にはブランチ⑦として「うとする」が収められることになって、「うとする」「ようとする」ともに（直前の状態を表す）意が吾人に認識された。

この間に、その「(よ) うとする」を複合辞と認めて取り扱っている著作に、森田良行・松本正恵著『日本語表現文型』（株式会社アルク・一九八九年）が存在する。一般にいふ連語助詞や連語助動詞を複合辞として取り扱うもので、その「助動詞と同様の働きをする表現」の五に「意志・超意志を示す」とあり、その1に「意志・決意」とあって、そこに「(よ) うとする」が立項されていて、「(よ) うとする」が（意志・決意を表す）意と認識された。

二十一世紀になってからの新刊として登場した北原保雄編『明鏡国語辞典』(大修館書店・二〇一〇年)には、助動詞「う」にも助動詞「よう」にも、ともにプランチ④として⑦(実現する直前である)意と①(実現のために努力する)意とが掲げられている。その①の各用例「思い出そうとしても思い出せない」「起きようとしても起きられない」は、共通する構文であった。

以上からは、「(よ)うとする」の「(よ)う」が意志の意を担っている場合に限っている、と解されよう。続く「と解する」に、直前の状態や努力の姿勢が担われている、と解したのであろう。

そして、さきごろ、鈴木薫「中古中世における「むとす」と「むず」(國學院大學国語研究会「国語研究」第八十三号)を介して、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(二〇〇一年)に載る現代語「(よ)うとする」の文例を知ることができた。鈴木論文には、日本語教育において注目する四文例に加えて鈴木が加えた一文例の計五文例が引かれている。

(1)彼は子どもたちを医者にしようとしている。

(2)お金を払おうとしたら、財布がなかった。  
(3)真っ赤な夕日が水平線に沈もうとしている。  
(4)長かった冬が終わりを告げようとしています。  
(5)両親が病気で死のうとしているとき、もうだめだと思っても、看病のかぎりをつくすではないか。

鈴木は、引用書の解説を受けとめたうえで、(2)を自身の意向、(1)を他者の意向と呼び、(3)・(4)・(5)を実現への推移と呼んで、三つの意味に再整理している。それに先立って、(1)・(2)を意志的行為、(3)・(4)・(5)を無意志的な成り行きともいっている。

(3)・(4)・(5)の文例は、そこに見るように確かに存在する。ただ、改めて調査などしなくても、その用例頻数が高くないことは、感覚的にはあるが、感得できる。『日本国語大辞典』については不備ともいえようが、森田・松本著書や『明鏡』については、意志的行為をいう「(よ)うとする」にとどめたとも見えてくる。一方、その『中上級を教える人のための日本語教育ハンドブック』については、(3)・(4)との出会いが限られるという教授資料が期待されてもこようか。鈴木論文が加えた「死のうとする」については、か

ねてから関心を寄せていたところである。以上が、令和二年三月末までの筆者の「(よ)うとする」についての認識である。ただ、以上は、術語などを用いることなく説明するというのであったら、日本語使用者の大方が、そう理解しているところであろう。

## 二 無意志主体の「(よ)うとする」の背景

「(よ)うとする」が直ちに古典語「むとす」の近現代語となつているとはいえない。殊に、意志人物主体「むとす」は「むと思ふ」とどう相違するかも、その後の「んとす」と「んと欲す」とがどう相違するかも、筆者は理解できていない。近現代に至ってからも、「(よ)うとする」の一方に「(よ)うと思う」「(よ)うと決意する」も存在する。

仮に「むとす」が「む」の「う・よう」化と「す」の「する」化によって「(よ)うとする」になったとしても、有意志人称主体として整理したとき、「む」「(よ)う」は一人称主体にしか応じないのに、「むとす」も「(よ)うとする」も、一人称主体はもとより、二人称主体にも三人称主体にも応じるのである。この疑問を人称の転換と見たのが、旧

稿「(…む)とす」表現の読解と問題点―主体の人称と意志の有無とに注目して―」(『國學院雑誌』一一九一六・平成三十年六月)／「第三人称主体「(…む)とす」表現の読解―その「む」の多くを意志と認識するのは共同幻想か―」(『國學院雑誌』一二〇一三・平成三十一年三月)である。

それに比して、無意志主体の「(…とす)」は、素直に表現されていて、読解も容易であった。

○これと聞きて、かぐや姫いふ、「…：…：…かの国の人來ば、〔塗籠ノ戸〕みなあきなむ」とす。…：…

(竹取・帝、かぐや姫の昇天をはばもうと兵を出す)

○夜ふくるまで酒飲み、物語してあるじの親王醉まひて

入りたまひなむとす。(『十一日月モ』かくれなむ)

とすれば、かの馬の頭むまのよめる。

(伊勢・八十二・渚の院)

『竹取物語』の、その用例は、かぐや姫が「(月の世界の人が来たなら、みんな「塗籠の戸も」開いてしまっだらう」と思われる。」と言っている用例である。『伊勢物語』の、その用例は、惟喬元たかの親王みこが鷹狩の後、水無瀬の離宮で宴会が続ぎ、そのまま寝所にお入りになってしまふことになる

場面にある。「(十一日の月も)隠れてしまおうであろう」と思われるので、「あの馬の頭が一首詠んだ、という場面に見る用例である。

その詳細は、さきの旧稿に述べたところであるが、そのような「(…む)とす」の「む」は推量の意を担っており、「す」は自動詞の「す」であって、「思われる」意に読み取れる「す」である。現代語でも、「物音がする」や「レモンの味がする」などの「する」に残る〈感じられる〉意と通う〈思われる〉意の「す」である。

無意志物主体「(…む)とす」も、現代語の無意志物主体「(よ)うとする」同様、用例頻数は高くない。その僅少用例のなかに、幸いなことに、あの『古事記』歌謡の用例が含まれていた。

○狭井河よ 雲立ち渡り 畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす (歌謡二〇)

「風吹かむとす」は、「風吹かむ」とす」で、「風が吹くだろう」と思われる」と読み解くところである。それは、「風が吹こうとしている」とも訳されてきた。ただ、それは、意志を表すものではない。無意志物主体「(よ)うとする」

である。異なる切り口からの「古事記」訓読文の「むとす」と補読の「たまふ」とから―その「む」は、どう読みとったらよいか―(「國學院雜誌」一二二―三・令和二年三月)において、前二稿を受けて触れたところである。

「む」が意志でも推量でもある「(…む)とす」については旧三稿で見えてきているが、時代はいつか、意志だけの「むとす」を存在させていた。中世末か近世か、漢文訓読に残る「將に…(せ)んとす」などの「んとす」である。それが、近代文語文に頻用される。「(よ)うとする」には、その近代文語文の口語体評論文となった過程が見えてくる。中古和文の「むとす」は、そのまま、意志も推量も、(よ)うとする」と現代語訳される。確か、英文の現在進行形のある用法も、(よ)うとする」と和訳されていた。辞典類の子見出しを経て、いま、ようやく、複合辞として取り扱われたりするに至っているのである。

さて、その「(よ)うとする」の無意志物主体の用例は、既に見てきているように意識されなくなってきた。『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』が文例(3)・(4)を掲げた意図は奈辺にあるのであろうか。(3)の「真っ

赤な夕日が水平線に沈もうとしている。」は、文学作品の情景描写である。まさに上級日本語文である。(4)は、「告げようとしている」とあっても、意志人物主体の擬人法などと読んでほならない。「終わりを告げる」を自動詞(終わる)と読み取って英訳などさせる学習なのであろうか。(5)は鈴木論文筆者の取り立てた「死のうとする」である。自動詞「死ぬ」を素直に用いた結果の表現である。

こようなことを考えていて、いつか、負担なく読めるよう現代仮名遣いにくれてくれる新潮日本文学の1から10までの明治・大正期作家(森鷗外・島崎藤村・夏目漱石・徳田秋声・永井荷風・谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎・芥川龍之介)の作品から、無意志物主体「(よ)うとする」を選別、検出していた。「(よ)うとする」の使用そのものに既に個人差が顕著で、殊に徳田秋声は用例に限られ、無意志主体の「(よ)うとする」は全く見ることができなかった。小稿は、その時期の作家たちの用例と、若干の読解の試みである。

三 物理的な一定の到達点に向けて物理的に漸移・推移していく状況を述べる「(よ)うとする」(A群)

(i)空間的にどのように延長しているかが見えてくる表現を構成している。

A(1) お種や三吉の生れた小泉の家は、橋本家とは十里ほど離れて、丁度このの<sup>き</sup>き<sup>き</sup>よう<sup>き</sup>と<sup>き</sup>する<sup>き</sup>ところ<sup>き</sup>に<sup>き</sup>在<sup>き</sup>った。

(藤村『家』259下)

A(2) そこは美濃路の方へ下り<sup>よ</sup>う<sup>よ</sup>と<sup>よ</sup>する<sup>よ</sup>山の頂<sup>よ</sup>にあ<sup>よ</sup>った。

(藤村『家』486下)

A(3) 日頃顔を見知った八百屋夫婦も、本町から市町の方へ<sup>か</sup>曲<sup>か</sup>る<sup>か</sup>う<sup>か</sup>と<sup>か</sup>する<sup>か</sup>角<sup>か</sup>の<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>た<sup>か</sup>り<sup>か</sup>に<sup>か</sup>陣<sup>か</sup>取<sup>か</sup>つ<sup>か</sup>て<sup>か</sup>青<sup>か</sup>い<sup>か</sup>顔<sup>か</sup>の<sup>か</sup>亭<sup>か</sup>主<sup>か</sup>と<sup>か</sup>肥<sup>か</sup>つ<sup>か</sup>た<sup>か</sup>内<sup>か</sup>儀<sup>か</sup>と<sup>か</sup>が<sup>か</sup>互<sup>か</sup>いに<sup>か</sup>片<sup>か</sup>肌<sup>か</sup>抜<sup>か</sup>で<sup>か</sup>、<sup>か</sup>稻<sup>か</sup>荷<sup>か</sup>鮫<sup>か</sup>を<sup>か</sup>潰<sup>か</sup>け<sup>か</sup>たり<sup>か</sup>、<sup>か</sup>海<sup>か</sup>苔<sup>か</sup>巻<sup>か</sup>を<sup>か</sup>作<sup>か</sup>つ<sup>か</sup>た<sup>か</sup>り<sup>か</sup>し<sup>か</sup>た。

(藤村『千曲川スケッチ』518下)

A(4) 古本屋の店は、山谷堀の流れが地下の暗渠に接続するあたりから大門前日本堤橋のたもとへ<sup>で</sup>出<sup>で</sup>よう<sup>で</sup>と<sup>で</sup>する<sup>で</sup>薄<sup>で</sup>暗<sup>で</sup>い<sup>で</sup>裏<sup>で</sup>通<sup>で</sup>り<sup>で</sup>に<sup>で</sup>あ<sup>で</sup>る。

(荷風『溼東綺譚』108上)

右の(1)・(2)・(3)・(4)は、地形や道路についていっている

ことになる。

A (5) 日の色はもううすれ切つて植込みの竹のかけからは、早くも黄昏がひろがるうとするらしい。

(芥川『或日の大石内蔵助』85下)

A (6) しかし汽車が今将に隧道の口へさしかかるうとして、いる事は、暮色の中に枯草ばかり明るい両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点の行く事であつた。

(芥川『蜜柑』218下)

(5)・(6)は、移動する黄昏や汽車が空間にそのような転移を見せていることで共通する。次の(7)も、こぼれた酒が移動することで、そのように漸移していくこともなるので、これまた共通することになる。文語文である、あの『古事記』歌謡の「風吹かむとす」などと同じ「むとす」と見えるところから、(流れ寄つていくだろうと思われ)と解したい。

A (7) この騒ぎに少女の前なりし酒は覆へりて、裳を浸し、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這ひて、人々の前へ流れよらむとす。(鷗外『うたかたの記』146上)

十分にその意味するところを捉えてはいないが、空間に見える漸移を述べることに関わる「(よ)うとする」として整理しておく。

(ii)時間的にどのよう経過しているかが見えてくる表現を構成している。

A (8) その白い羽根が或る瞬間には明るく、或る瞬間には暗く見え出すと、長い北国の夜もようやく明け離れて行くうとするのだ。(有島『生れいづる悩み』427下)

A (9) 十一月もそろそろ末になるうとしている或る晩、成瀬と二人で帝劇のフィル・ハアモニイ会を聞きに行つた。(芥川『あの頃の自分の事』186下)

A (10) ところが残暑が初秋へ振り変るうとする時分、夫は或る日会社の出がけに、汗じみた襟を取変えようとした。(芥川『秋』242上)

右の(8)・(9)・(10)は、時間の推移をいつている点で共通するが、殊に(9)・(10)は、季節の変化をいつている点で、いつそう近い関係にある。(8)については、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』の文例(3)との関係が見えてくる。夕日が沈むのも朝日が昇るのも、そして夜が明

けるのも、その推移を描写する表現として、「(よ) うとする」が採用されていたのである。

A (11) その時の君は早や中学を卒え<sup>お</sup>ようとするほどの立派な青年であった。(藤村『千曲川のスケッチ』503上)

A (12) 捨吉の二十一という歳も二週間ばかりのうちに尽きようとする頃であった。

(藤村『桜の実の熟する時』671上)

A (13) …、おぼろげながら神というものを恋しかけた十二三歳頃の葉子に、学校は祈禱と、節慾と、殺情とを強制的にたたきこもうとした。十四の夏が秋に移る<sup>う</sup>とした頃、葉子は不図思い立って、美しい四寸幅程の角帯のようなものを絹糸で編みはじめた。

(有島『或る女』40下)

右の(11)・(12)・(13)は、年齢をいつている点で共通する。(13)は、そこに限って読めば季節の変化をいつているが、大きく読むと、年齢についていつていると見たほうがよいであろう。

A (14) …、夜は明け<sup>ん</sup>とす、客人の目疾<sup>めやみ</sup>せられぬ用心に、涼傘<sup>ひがき</sup>ささせ申さんと、…。(鷗外『即興詩人』529下)

右の(14)は、(夜は)明け<sup>よう</sup>として「いる」と現代語訳されて、(8)と同じで、時間の推移をいつている。

以上の(i)・(ii)併せて、視覚・聴覚で捉えられる物理的な動きを捉える表現となっている。(1)と(12)とは、同じ「尽きようとする」だが、空間をも時間をも表現している。

#### 四 自然現象として至当な終着点に向けて変化していく状況を述べる「(よ) うとする」(B群)

(i) 物理現象として当然そうなる変化を捉える表現を構成している。

B (15) 其処には丁度赤と青との花火が、蜘蛛<sup>くも</sup>手に闇<sup>はじ</sup>を弾きながら、将<sup>まさ</sup>に消え<sup>よう</sup>とする所であった。

(芥川『舞踏会』238下)

実は、ここに分類される用例は、この(15)だけである。三の(i)に収めようかとも思ったが、その変化の方向が消滅であるところから、終着点に向けての動きとして捉えたのである。

(ii) 心理現象として抵抗できないままそうなる変化を捉える表現を構成している。



B(16) 君の心はただ一途に、眠り足りない人が思わず<sup>まがた</sup> 暇<sup>ま</sup>をふさぐように、崖の底を目がけてまろび落ち<sup>よう</sup>とする。  
(有島『生れいづる悩み』454上)

B(17) 重錘<sup>おもり</sup>をかけて深い井戸に投げ込まれた燈明のように、深みに行く程、君の心は光を増しながら、感じを強めながら、最後には死という己の冷たい水の表面に消えてしまお<sup>う</sup>としているのだ。  
(有島『生れいづる悩み』454上)

右の(16)・(17)は、同じ作品の同一ページにある用例で、現れる順序は(17)が先で(16)が後であるが、物理現象を比喻として用いて、心理現象を述べている点で共通する。

B(18) 葉子の胸は言葉通りに張り裂け<sup>よう</sup>としていた。  
(有島『或る女』165上)

B(19) 葉子は精も根も尽き果て<sup>よう</sup>としているのを感じた。  
(有島『或る女』306上)

B(20) その中で君の心だけが張りつめて死の方へとじりじり深まって行<sup>こう</sup>とした。  
(有島『生れいづる悩み』454上)

右の(18)・(19)・(20)とも、苦悩の極限に向けての心の動きを

描写している。

B(21) 最後に武右衛門君の心いきを一寸紹介する。君は心の権化<sup>ごんげ</sup>である。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心を以て充滿せるが如く、正に心配を以てはちきれ<sup>ん</sup>としている。  
(漱石『吾輩は猫である』231下)

B(22) 今やわが心霊界は徐<sup>おもむ</sup>ろに薄暮に沈ま<sup>ん</sup>とす。  
(芥川『河童』500下)

右の(21)・(22)とも、文語表現の「んとす」であるが、(21)は口語表現のなかに残った文語的言い回しであり、(22)は文語体そのものに見る用例である。(22)は、自然界の空間に見る自然現象を借りて、心霊界にあつた意識が消えていく状況をいっているであろうか。

(iii)精神状態が許容できない限界に到達する状況を捉える表現を構成している。

B(23) 彼は比較的遠い距離に立って細君の父を眺めた。然し彼の眼に漂う色は冷静でも無頓着<sup>むとんじゃく</sup>でもなかった。寧ろ黒い瞳から閃<sup>ひらめ</sup>く<sup>こう</sup>とする反感の稲妻であった。  
(漱石『道草』992上)

右の(23)は、方向性が消滅に向かうものではないところから、別項としてみたが、その傾向を捉えきれてはいない。前項に収めた(17)の「(胸が)張り裂けようとする」も、この項に相当したのであつたらうか。

(iv) 生活が逼迫して困窮の限界に到達する状況を捉える表現を構成する。

B (24) 鼻筋は瘦せ細って精神的な敏感さを際立たしていった。頬の痛々しくこけた為に葉子の顔に云うべからざる暖かみをつくる笑窪を失おうとしてはいしたが、その代りにそこには悩ましく物思わしい張りを加えていった。

(有島『或る女』215下)

右の(24)は、消滅に向かっているが、その後の展開を見せる表現である。とにかく、精神面の限界状態が肉体としての腫や笑窪の変化に現れている点で共通する用例である。

B (25) そして又落ち込もうとする窮境の中から血の出るような金を欠かさずに送ってよこす。

(有島『或る女』253下)

この項は、この(25)に限られるが、そういう状況の描写は類例もあろうかと思えてくる。

以上、なお雑多な印象が残る不十分な整理であるが、終着点に向けて変化していく状況を述べる「(よ)うとする」として括ることができたようである。そして、この本章の極端な場合が次章となるのである。

五 究極の到達点である「死」に向けて漸移する状況を述べる「(よ)うとする」(C群)

C (26) 二人に共通な父、その父の死のうとして枕元で、兄と私は握手したのであつた。

(漱石『こころ』803上)

C (27) 彼は死のうとしてその人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた。

(漱石『道草』972上)

C (28) 水に溺れて死のうとする人が、世界の何処かの隅で、小さな幸福を得た人のあるのを想像して、それに祝福を送るといふようなことがとてもあり得ないと同様

に、…。(有島『惜しみなく愛は奪う』354下)

右の(26)・(27)・(28)の「死のうとする」は、いずれも、他者が「死にそうになっている」意を述べている用例であつて、自身がみずから「死のうとする」ことをいつているも

のではない。無意志三人称主体の「死のうとする」である。(26)の主体は二人の父であり、(27)の主体は「その人」で、金の無心が続けた、あの養女だった人である。(28)の主体は、想定された一般の人である。

C(29) 見る人の想像力は彫刻の外へ一歩も踏み出す事が出来ない。唯ラオコオンの呻吟うんげんするのを聞き、既に死なんとするのを見せられるばかりである。

(谷崎『金色の死』987下)

C(30) 牛は目を廻し、足をバタバタさせて、鼻息も白く幽なすかな呻うめき声を残して置いて氣息いきも絶えんとした。

(藤村『千曲川のスケット』554下)

C(31) 溺おぼれんとする者が選くまず物を掴つかむように——或いはもつと本統に愛情を感じたか、それはよく分らないが、其処そこに出て来た一人の男に栄花は直ぐ身も心も任せて了しまった。

(志賀『暗夜行路』118上)

右の(29)・(30)・(31)もまた、その、自然と〈死にそうになっている〉状況を述べている表現である。(29)は「死のうとする」の文語的言い回し「死なんとする」を残した用例である。(30)・(31)は、ともに結果的には「死のうと

する」と読み取ってもよい用例で、いずれも、文語的言い回しを残している。

もちろん、現代にあつては、自死を指している「死のうとする」が存在するが、当代のこの作家たちのこれら作品のなかにはその用例を見ることはできなかった。それに相当する表現として、次の用例が拾い出せた。

○「…、死のうと思つたつて時が来なければ容易に死ねる訳のものでは無いね…」

(藤村『家』272上)

さて、同じように「死に直面する」といっても、病死をいうのではなく、危険が身に及んでくる場合がある。次例は、川での舟漕ぐ遊びでの「死のうとする」場面である。

C(32) 「こちよの此遊あそびや。むかし我命喪うしなはむとせしも此湖の中なり。…。」

(鷗外『うたかたの記』151下)

「喪おうとする」と現代語訳できる文語の「喪はむとす」である。その現代語「喪おうとする」は、前章の(24)に見た「失おうとする」と同じことになる。消滅に向けて近づく動きである。

六 受身の助動詞が直上にあつて、その受身の状態に向けて抵抗できないまま漸移していく状況を述べた。「(よ) うつする」(D類)

D (33) 吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといひながら出て来た。

(漱石『吾輩は猫である』6上)

D (34) …、やがてその人が車に乗せられて連れて行かれようとするけはいに、又じつとしていられないで、…。

(谷崎『少将滋幹の母』825下)

D (35) 「…。神と一緒にいる時は、神を忘れている。少なくとも神にはなれている時、神のもとに帰る許しを得たい時、一番祈りたい気持がする。それから神から見すてられよう」としてすがりつく時に。…」

(武者小路『幸福者』123上)

D (36) …、段々と世間から埋もれて行かねばならないような境遇に押し込められようとする運命。

(有島『或る女』57下)

D (37) 全く実用のためにのみ造られた真四角な建築物一つ

にもそこに個性の表現が全然ないということはお出来ない。然しながらその中から個性を、即ち愛を捜し出すということは極めて困難なことだ。個性は無意味な用材の為に遺憾なく押しひしがれて、おまけに用材との有機的な関係から危く断たれようとしている。

(有島『惜みなく愛は奪う』388上)

右の(33)・(34)・(35)・(36)・(37)は、いずれも、その受身の状態に陥りそうになっている状況についての描写である。

D (38) …、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めている妃の風情と云い、…、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄いままでに巧みに描かれていた。

(谷崎『刺青』901下)

右の(38)は、「刑せられようとする」の文語形で、その場面の物凄さを表すために意識的に採用した文語形のように見えてくる用例である。

七 読解の試みⅠ——同一動詞に付いた「(よ)うとする」が、有意志主体の「(よ)うとする」とも無意志主体の「(よ)うとする」(O群)ともなる用例の読み分けの手掛かり

第五章においてA(3)として引いた、その用例は、「曲ろうとする」であった。その「曲ろうとする」は、空間の広がりの中に延長して占めている物理的な位置を捉えた表現に採用されている用例であった。いま、A(3)にO群としての用例でもあるので、この用例だけ、A・O(3)とすることとする。

A・O(3) 日頃顔を見知った八百屋夫婦も、本町から市町の方へ曲ろうとする角あたりに陣取って青い顔の亭主と肥った内儀とが互いに片肌抜で、稲荷鮎を漬けたり、海苔巻を作ったりした。

(藤村『千曲川のスケッチ』518下)

その「曲ろうとする」は、以下に見るように、有意志主体の用例を見るのである。

○三四郎は立ったまま、女の後姿を見守っている。女は

角へ来た。曲ろうとする途端に振り返った。三四郎は赤面するばかりに狼狽した。(漱石『三四郎』465下)  
○そして門を出て左へ曲ろうとして不図道傍の捨石にけつまずいて、はっと眼が覚めたようにあたりを見廻した。(有島『或る女』34下)

右の二例の「曲ろうとする」は、三四郎や葉子がそれぞれの意志をもってそうしようとする瞬間をいつている。それぞれの「曲ろうとする」の直後の「途端に」や「不図」からも、その時間的な瞬間をいつていることが感じ取れる。併せて、動作主が明確に存在する用例である。それらに対して、AO(3)の「曲ろうとする」は、その被修飾語「角あたり」からも、地理的な位置をいつていることが読み取れる。

そこで、以下に文章の展開によつては有意志主体の「(よ)うとする」ともなる、無意志主体の「(よ)うとする」の用例を拾い上げていくこととする。

× × ×

O(39) K子は姉達が嫁入りの時、残して行った古着を直して着せられていた。それが今は姉よりも大きくなら

としてゐるし、元々古着も姉達が未だ小さかった時の物が多かったから、今のようにならないうち内でもそのまま、着られるものはなかった。

(志賀『末っ児』506下)

右の(39)の「大きくなろうとする」は、K子の背丈が姉たちより大きくなりそうになっていることをいって、K子がその意志として姉たちより大きくなろうと思つてゐるのではない。無意志主体としてのK子の背丈が意志主体のK子の意志に関係なく、姉たちの背丈よりも大きくなりうになつてゐる、というのである。

その「大きくなろうとする」は、一般的には、有意志主体の用例のほうを多く見せるであろうと推測される。「次郎は、兄の太郎より大きくなる」<sup>[7]</sup>として、バスケット・ボール部に入部した。「健夫くんのほうが、雅彦くんより、人間の大きくなる」<sup>[8]</sup>とする姿勢が見られる。」などである。それら用例についていうと、それぞれの動作主である次郎や健夫の存在が最も大きな手掛かりとなる。併せて、具体的な動作に関連する表現に手掛かりを求めることである。

それに対して、無意志主体については、本文に表現され

ていない部分も多く、捉えにくい。O(39)についていうと、その本文にいう無意志主体は、文頭の「それが」である。その「それが」の「それ」の指示内容は、この本文には表出されていない。前文から、姉たちの古着を直して着せられていたK子を捉えたうえで、「K子の背丈」を想定することになる。

× × ×

O(40) 突然一個の球が流星のごとく、ぶらぶら歩いて来るわれわれの足元に小砂利を轆<sup>まき</sup>つて転がって来た。それを捕えようとして、制服の上衣<sup>うわぎ</sup>を脱いでシャツ一ツになつた中学生が向う見ずに駈けて来て、危く先生に突き当<sup>う</sup>らうとして、驚いて身をよけようとした拍子に、中心を失つて激しく前へのめつた。

(荷風『歓楽』215上)

ここで注目しようとしてゐる「突き当<sup>う</sup>らうとする」の前(後)にも、「捕えようとする」<sup>[9]</sup>と「よけようとする」<sup>[10]</sup>という「(よ)うとする」の用例が見られるが、それらが有意志主体の「(よ)うとする」であるのに対して、この「突き当<sup>う</sup>らうとする」は、無意志主体の「(よ)うとする」である。初夏の

運動場を先生と私とがぶらぶら歩いて来ていたときのことである。制服の上衣を脱いでシャツ一枚になった中学生が向こう見ずに駈けてきて、先生に突き当たりそうになって、その中学生が身をよけようとした瞬間、中心を失って前のめりに転んだ、というのである。

「向う見ずに駈けて来て、」というのだから、その中学生は、突き当たろうという意志をもって「突き当たろうとして、」というのではない。無意志主体の「突き当たろうとする」であること、明らかである。

一般的に想定される「突き当たろうとする」は、多くが有意志主体の「突き当たろうとする」であろう。「あの車は、私の車に突き当たらうとして運転してきた。」「敵のフォードのA選手に突き当たらうとして、激しく攻撃した。」などである。それらに対して、O(40)の「突き当らうとする」は、たまたまそういう成り行きとなった結果と云ってよいであろう。

八 読解の試みⅡ——悩ませる「(よ)うとする」  
／ 感覚で読むよりほかない「(よ)うとする」(P群)  
／ 修正したい「(よ)うとする」「んとす」(Q群)な  
ど

小稿第六章において、受身の助動詞が直上にある「(よ)うとする」について取り立ててきた。共通する用例を六例見てきていて、一定の定着した傾向と見てよいであろうと認識している。そこで、次例も、その一例と見てよいか検討していくこととした。

○葉子は自分が船客達から激しい好奇の眼で見られようとして知っているのを知っていた。

(有島『或る女』56下)

そこで、この「見られようとする」は、葉子が船客たちから好奇の眼で見られそうになっているのであるうか、それとも、葉子が船客たちから好奇の眼で見てもらおうという意志をもってそれを期待しているのであるうか。後者は一般的ではないが、葉子という人物からは、そうも考えられなくはない。それに、受身の助動詞に付く「ようとする」

で、有意志主体の用例もあったのである。

○軟派の連中は女性に好かれようとする。

(鷗外『キタ・セクスアリス』26上)

したがって、拗ね者は、「嫌われようとする」振る舞いまですることともなるであろう。しかし、『或る女』の「好奇の眼で見られようとする」が有意志主体であると、その一文だけでいうことはできない。その一文に続いて、有島は以下のように述べていたのである。

○立役や幕明きから舞台に出ているものではない。観客

が待ちに待って、待ち草臥れそうになった時分に、し

ずしずと乗り出して、舞台の空気を思うさま動かさね

ばならぬのだ。葉子の胸の中にはこんな狡獪ヤウカシいいた

ずらな心も潜んでいたのだ。(有島『或る女』56下)

もはや、その「激しい好奇の眼で見られようとしている」が有意志主体の「(よ)うとする」と見えてきたであろう。葉子の意志が船客たちから激しい好奇の眼で見られることを期待していたのである。文末の「知っていた。」は、そういうことを期待している葉子自身のことを葉子は知っていた、といっていることになるのである。

× × ×

当方は動くことなく、その場において、先方がこちらに接近してくるのを待つのが動詞「迎える」である。動くのは先方だけで、その先方が季節や行事である場合、「春を迎える」とか「新学期を迎える」とかいいうことになる。改めてそのように認識したのは、「(よ)うとする」の次の用例に出会ったからである。そして、その「(よ)うとする」を意識しすぎると、「迎える」を(待つ)として受けとめていることになっていようである。

P(41) 旧暦で正月を迎えようとする村々を通過した時は、途中まで復た煤掃すすはきの音を聞いた。

(藤村『桜の實の熟する時』677上)

右の(41)を読んで、直ちに感じ取った「正月を迎えようとする」は、無意志主体の「(よ)うとする」であった。そして、一定の手順を踏んで考えた結果としても、筆者の感覚としてはそのように感じている。

捨吉は東京を逃れて東海道を下り、鎌倉から興津あたりまで歩いて行って、その途次、そのような村を通り過ぎたのである。そこは、たまたま通り過ぎた村々であって、捨



吉は、何を手掛かりにそう感じたのであろうか。残念ながら、前段落に「正月らしく映あつて来ている日の光」とあるだけである。当代、その地域に松飾りの風習があったかどうかなど、そういうことは、まったくわからない。ただ、その「旧暦で正月を迎え」るが、「旧暦のままで正月を迎え」と読めてきて、さつきも聞いたが、また煤掃きの音を聞くことになった、と読めていたように内省される。

ところが、再読して、その「(よ)うとする」を、先に触れたように強く意識すると、村々の人々が、新暦を強制する時代の風潮に逆らって、意志をもって旧暦で正月を迎えようとしているとも読めなくはないとも思えてきたのである。現代人の多くは、そう読むのではないかとも思えてきたのである。

筆者は、この「(よ)うとする」も、無意志主体の「(よ)うとする」であろうと感じている。ただ、そのように、感覚では受けとめられても、そう読み取ることができたといえる何かが、なお見えてこないのである。動詞「迎える」の語義をどう意識しているかとも関係することになるか。

× × ×  
Q(42) 人が濡れかかったり、又は絶壁から落おちようとする  
間際に、よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として、  
その頭に描き出す事があるという事実には、この哲学者  
は一種の解釈を下したのである。

(漱石『道草』949上)  
右のQ(42)の「落ちようとする」が無意志主体の「(よ)うとする」であることは、容易に理解できるところである。ただ、その「絶壁から落ちようとする」は、「又は」を介して、「濡れかかったり」と並立の関係にもあるようである。文頭の「人が」は、その並立の関係となる両語句の主語であろうと見えてくる。そこで、その両語句は、どのように整えたらよいのであろうか。並立助詞「たり」は、その助詞の種類名どおり並立させなければならぬ。そのうえで、補助動詞「する」の未然形「し」の力を借りることになる。その「し」は、「濡れかかっ」と「落ちかかっ」との代行をしている補助動詞としての「する」の未然形である。早速、「濡れ」に付いている複合動詞後項型補助動詞「かか」を「落ち」の下にも付けて、バランスを取りたい。

○人が溺れかかったり、又は絶壁から落ちかかったりし  
ようとする間際に、…。

右の表現が、漱石『道草』949上にあるQ(42)文の修正表現である。その「しようとする」の「し」が「溺れかかっ」と「落ちかかっ」との代行をする補助動詞「する」の未然形「し」であることは、繰り返し述べてきているところである。そこで、この「ようとする」は、補助動詞「する」の未然形に付いていることになり、実質的には、「溺れかかっ」と「落ちかかっ」とを受けていることになる。そして、「溺れかかろうとする」か、又は、「落ちかかろうとする」間際に、と読解されることになるのである。

以上の読解作業から、「…かかったり…かかったりしようとする」が、並立の関係の無意志主体の「(よ)うとすること」の表現形式ということになるであろう。

## 後記

有意志主体の「(よ)うとする」が圧倒的に多いなかの無意志主体の「(よ)うとする」である。その無意志主体の「(よ)うとする」は現代語に向けて漸減してきていること

は明らかであるが、用法を限つての衰退や消滅なのか、その整理が今後期待される。